

一般演題6-3 高気圧酸素治療における看護の役割

松田健太郎

医療法人財団 樹徳会 上ヶ原病院

本内容は平成28年7月9日滋賀県草津市で行われた第1回日本高気圧環境・潜水医学会近畿地方会学術集会で発表した内容を加筆・再構成したものである。看護師は入院生活において最も患者の近くにいることができる存在であり、一人の生活者としての患者をよりよい健康状態に導く上で重要な役割を担うと考える。しかしながら、看護師における高気圧酸素治療（以下HBO）のイメージは単なる治療法の一つにしか過ぎず、その内容はおろか言葉すら聞いた事のない看護師が多い。HBO実施施設に勤務する看護師がHBOそのものに興味を持ち理解し、HBO実施患者に対して看護介入を行う場面が増えること、そしてHBO実施担当者が看護師と積極的に連携を図ることを強く望み、本会で改めて述べたい。

HBOが適応となる疾患には急性期の一酸化炭素中毒から、慢性期の放射線治療における晩期障害（放射線性潰瘍や骨髄炎）とさまざまなものがある。病期も疾患も異なっているが、HBOを受ける全ての患者に対して、重要な看護の役割は①安全安楽に治療を受けるための準備と患者教育、②HBOに関連したストレスや有害事象の予防及び早期発見とその対応、③予定された回数の治療が遂行できるよう心身へのサポート及び全人的看護を行うこと、の3点である。

1点目の安全管理としては、支燃性の強い酸素の特性を理解し安全管理に細心の注意を払うことが必要である。特に安全管理を怠る事は、HBOそのものの継続や更なる発展に大きく関わることである。そのためにも、直接治療の場に立ち会わない看護師であっても治療の意義や副作用だけではなく、治療環境や、酸素の特性・圧力変化といったことを理解し安全管理や患者教育に携わる必要がある。例えば、出棟時の検温や持ち物チェックの際、チェックリストに沿って通り一遍に行うのではなく、HBOの原理・原則を理解した上で患者の個別性に合わせ、指導・教育を兼ねながら治療前の準備を行うことで患者のみならず看護師自身の

安全への意識を高めることになる。

次に2点目として、閉所での拘束感（第1種装置）や、圧力変化による鼓膜・中耳への負担等々、心身へのストレスに対する予防や対策を考慮することも重要である。最後に3点目について、放射線治療後の晩期障害等に対するHBOは場合によって、50～80回以上と治療が長期化することもある。そんな時、身体状態を観察・管理するだけに留まらず、患者のモチベーションを如何に維持させ、予定される治療回数を遂行できるよう心（精神）へのサポートをするか、看護師の果たす役割は大きい。HBOを受ける患者にはとても幅があり、学生や現役で働かれている方、癌サバイバーの方、高齢者、時として小児と様々である。個々の精神・認知機能や社会的役割は多様であるため、患者ごとに個別的なアセスメントを行う必要がある。最も患者の近くにいることができる存在である看護師こそ、患者の心身のわずかな変化にいち早く気づきアプローチして行くことが可能である。例えば、放射線性大腸炎のように治療期間が長期に渡るが、出血が続く間はHBOの効果をなかなか実感できず、モチベーションが下がってしまうことがある。その様なきこそ、看護介入を要する場面であると考え。排便状況を観察する際に看護記録を目的とするだけでなく、患者本人が効果に気付くように、状態（出血量や性状・回数等）を観察し、患者自らも記録するような工夫を行い、可視化するなどの援助が可能ではないだろうか。

患者・医師・技師・看護師が一つのチームとなってHBOを遂行出来るよう、看護師自らがその役割を意識すべきであると考え。